



TITLE:

収益ト生産費トノ關係

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. 収益ト生産費トノ關係. 經濟論叢 1915, 1(4): 477-497

ISSUE DATE:

1915

URL:

<https://doi.org/10.14989/126916>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號四第

卷一第

論說

●收益ト生産費トノ關係

●專賣ト戰後財政

●經濟學認識論ノ若干問題(三完)

雜錄

●危險分散主義ノ原則

●經濟主義ニ就テ

●英吉利ノ農政問題(三完)

●享保年間ノ米價調節(二完)

報

●經濟的進化ト人口法則(二)

●戰爭利得稅新案

●獨逸帝國全體ニ亘ル半官企業組織新說

●英國ノ戰費ト經濟

●獨逸ノ植民の運動ノ回想

●相續稅ト家族制度

●本多利明ノ著書ニ就テ

●こんらゝ教授逝ク

法學博士 河上 肇

法學博士 小川郷太郎

法學博士 左右田喜一郎

法學博士 神戸 正雄

法學博士 戸田 海市

助教授 河田 嗣郎

法學士 本庄榮治郎

講 師 米田庄太郎

法學博士 小川郷太郎

法學博士 神戸 正雄

助教授 河田 嗣郎

助教授 山本美越乃

法學博士 神戸 正雄

法學士 本庄榮治郎

助教授 河田 嗣郎

經濟論叢 第一卷 第四號

論說

收益ト生産費トノ關係

法學博士 河 上 肇

一、收益遞増減ノ意義——二、收益又ハ産額増加ノ種々ノ場合——三、收益遞減ノ法則——四、企業組成ノ法則——五、技術ノ變化ニ本ク收益ノ變化(附、大小企業ノ利害ノ比較)——六、社會全體ヨリ見タル産額ノ増減ト生産費ノ増減トノ關係

一、收益遞増減ノ意義

茲ニ收益ノ遞増減ト云フハ、收益ノ遞増又ハ遞減ノ略ニシテ、生産費ノ増加ニ比例セザル收益ノ増加ガ規則正ク起ル凡テノ場合ヲ指ス。蓋シ生産費ノ増加ニ伴フテ引續キ收益ノ増加ヲ見ルハ普通ノ現象ナレドモ(註二)併シ其收益ノ増加ハ必シモ生産費ノ増加ニ比例セザルモノニテ、即チ或ハ其レ比例以上ナルコトアリ、或ハ其レ以下ナルコトガアル。而シテ前ノ場合ハ吾人之ヲ稱シテ收益ノ遞増ト謂ヒ、後ノ

場合ハ之ヲ名ケテ收益ノ遞減ト謂フ。即チ生産費ノ増加ニ伴フ收益増加ノ割合ガ引續キ生産費増加ノ割合ヲ超過スル場合ハ、吾人ガ茲ニ謂フ所ノ收益ノ遞増ニシテ、之ニ反シ、其收益増加ノ割合ガ引續キ生産費増加ノ割合ニ及バザル場合ハ、吾人ガ茲ニ謂フ所ノ收益ノ遞減デアル。今本論ノ目的トスル所ハ、斯カル意味ニ於ケル收益ノ遞増又ハ遞減ト單純ナル收益ノ増加又ハ減少ノ種々ナル場合ヲ區別シ、其原因ノ決シテ一樣ニ非ザルコトヲ明カニセントスルニ在ル。

(註一) 生産費ヲ増加スレバ必ズ收益ヲ増加スルトハ限ラヌ。其生産費増加ノ方法又ハ程度如何ニ依リ、却テ收益ヲ減少スルコトガ有ル。例ヘバ一定面積ノ土地ニ肥料ヲ施スコト或程度以上ニ及バンカ、土地ハ肥料ニテ埋マリ、米モ麥モ却テ全ク發育シ得ザルニ至ル。猶ホ本論ニ收益ト謂フハ、單ニ產額ト云フト略ホ同義ト解釋サレンコトヲ希望シテ置ク。

二、收益又ハ產額増加ノ種々ノ場合

一、收益又ハ產額増加ノ目的ヲ以テ行ハルル總生産費ノ増加ハ、之ヲ種々ノ場合ニ分ツコトヲ得。先ヅ之ヲ生産費ノ増加ニ伴フ各種費目ノ割合ノ變化如何ヲ標準トセンカ、大體ニ於テ之ヲ三種ニ分チ得ル。第一ハ、各種費目ノ割合ヲ變更スルコト無ク、凡テノ費目ヲ通ジ同ジ割合ヲ以テ之ヲ増加スルコトニ依リ、全體ノ生産費ヲ増加スル場合デアル。第二ハ、一種又ハ數種ノ費目ハ之ヲ元ノママニ存シ置キテ毫

モ増減スルコト無ク、而シテ其他ノ費目ハ凡テ之ヲ同ジ割合ニテ増加スルコトニ依リ、全體ノ生産費ヲ増加スル場合デアル。第三ハ、費用ノ増加ヲバ一種又ハ數種ノ費目ニ限ルト之ヲ凡テノ費目ニ及ストヲ問ハズ、其費用ノ増加ヲバ同ジ割合ヲ以テ行フコトナク、從ツテ費用増加前ト其後トヲ比較センカ、密ニ其費用ヲ増加セシ費目ト然ラザル費目トノ比例變動セルノミナラズ、之ヲ増加セシ費目ニ就テ見ルモ、其相互ノ比例ハ等ク變動ヲ生ズルニ至ル場合デアル。

此中第三ノ場合ハ、第一及第二ノ場合ノ混合ト見ルコトが出来ル。何故ト云フニ、若シ費用ノ増加チ一種又ハ數種ノ費目ニ限ランカ、其點ニ於テハ第二ノ場合ト同ジデアリ、又之ヲ凡テノ費目ニ及サンカ、其點ニ於テハ第一ノ場合ト同ジデアル。而シテ費用ヲ増加スルニ當リ、凡テノ費目ヲ通ジテ同ジ割合ヲ採ラズト云フコトハ、之ヲ分析シテ考フレバ、一旦凡テノ費目ヲ通ジテ之ヲ同ジ割合ニテ増加シ置キ、然ル後其中ノ或種ノ費目ハ之ヲ其儘ニ止メ、殘レル他種ノ費目ノミ一定ノ割合ニテ之ヲ増加スル、ト云フ二種ノ場合ノ混淆ト看做シ得ルカラデアル。此ノ如ク第三ノ場合ハ、畢竟第一及第二ノ場合ノ混合ニ外ナラサルが故ニ、吾人ハ此第一及第二ノ場合ヲ以テ原型的ノ場合ト看做サントスル者デアル。

二、收益又ハ産額増加ノ目的ヲ以テ行ハル總生産費ノ増加ハ、更ニ其生産費ノ増加ガ技術ノ變化ヲ伴フヤ否ヤヲ標準トシ、大體之ヲ分ツテ二種ト爲シ得、第一ハ一定ノ技術ノ下ニ生産費ヲ増加スル場合ニシテ、第二ハ技術ヲ變化シツツ生産費ヲ増加スル場合デアル。即チ前者ニ在ツテハ、只生産費ヲ増加セシノミニテ、其増加

前ト増加後トハ何等技術ノ變化ナケレドモ、後者ニ在ツテハ、生産費ヲ増加スルト同時ニ、其増加前ト増加後トハ之ガ技術ヲ同ウセザルモノデアル。

尤モ嚴密ニ云ハバ、生産費ノ増加ハ各種ノ費目ヲ通ジテ同ジ割合ニテ行ハザル限り、換言スレバ、生産費増加ノ結果各種費目ノ比例ヲ變化スルニ至ル場合ニ於テハ、其費目ノ比例ノ變化其レ自身ガ一ノ技術上ノ變化ナルガ故ニ、技術ヲ變化セズシテ費目ノ比例ヲ變化セシムルト云フコトハ、實ハ言葉其レ自身ニ於テ一ノ矛盾デアル。例ヘバまゝしやるハ收益遞減ノ法則ヲ定義シテ「土地ノ耕作ニ使用セラルル所ノ資本及勞働ノ増加ハ、若シ其事ガ同時ニ農業ノ技術ノ改良ヲ伴フニ非ザル限りハ、之ニ因リテ生ズル生産物ノ増加ヲ比例のナルヨリモ少カラシムルモノテアル」(一)ト云フヲ居ル。而シテ此ノ農業ノ技術ノ改良ヲ伴フニ非ザル限りハトカ、又ハ一定ノ技術ノ下ニ於テハトカ云フコトハ、收益遞減ノ法則ヲ説明スルニ當リ、殆ド凡テノ學者ノ立ツル條件デアル。併シ一定面積ノ土地ノ上ニ用ユル資本及勞働ノ分量ヲ増加スルナラバ、既ニ其事ガ一ノ技術上ノ變化デアル。我國デ現ニ行ハレツガアル一事例ヲ舉ゲレバ、近時稻ノ苗床ノ改良ハ、従來一坪ノ土地ニ約一升ノ種子ヲ蒔キシモノヲ減ジテ二三合ト爲セシコトが主デアルが、何人モ之ヲ以テ技術上ノ改良ニ非ズト認ムル者ハアルマイ。而カモ其技術上ノ改良ナルモノハ、只單ニ一定ノ土地ニ組合ハサルベキ資本(種子)ノ分量ヲ減ジタダケノ事デアル。盲ヒ換フレバ、生産費ノ各費目ノ割合ヲ變化セシコト其レ自身ガ、此場合ニ於ケル唯一ノ技術の改良デアル。要スルニ、技術ノ改良ハ、殆ド凡テノ場合ニ於テ、生産費ノ各費目ノ割合ヲ變化セシメ、更ニ生産費ノ各費目ノ割合ヲ變化スルコトハ、亦殆ド凡テノ場合ニ於テ、其レ自身ニ何等カ技術ノ變化ヲ伴フモノデアル。サレバ一定ノ技術ノ下ニ於テ生産費ノ各費目ノ割合ヲ變更スルト云フ言葉ノ眞ノ意味ハ、生産費ノ各費目ノ割合ノ變更ニ必然の二件ヲ所ノ技術ノ變化其レ自身ノ外ニハ、何等技術ノ變化ヲ施スコトナクシテ、生産費ノ各費目ノ割合ヲ變更スルト云フコトニ在ル。

三、最後ニ收益又ハ產額増加ノ目的ヲ以テ行ハルル總生産費ノ増加ハ、謂フ所ノ收益ノ増加ガ特定ノ一企業ニ拘ル事ナルカ、又ハ社會全體ヨリ見テノ事ナルカニ

依ツテ、之ヲ二ノ場合ニ區別スルコトが必要デアル。只ダ其必要ナキ場合ハ或事業ニ關シ完全ナル獨占ノ行ハレ居ル場合デアル。斯カル場合ニ於テハ、其獨占業者ガ自己ノ商品ノ產額ヲ増加スト云フコトハ、同時ニ其商品ノ社會全體ニ於ケル供給ノ増加トナルガ故ニ、之ヲ區別スルノ必要ナケレドモ、然ラザル限り、吾人ハ產額ノ増加又ハ減少ト生産費ノ増加又ハ減少トノ關係ヲ考フルニ當リ、常ニ如上ノ區別ヲ明カニスルノ必要ガアル。

收益又ハ產額増加ノ目的ヲ以テ行ハルル總生産費ノ増加ハ、之ヲ種々ノ標準ニ依リテ種々ノ場合ニ分チ得ルコト、以上迄ベタルガ如シ。以下余ハ先ヅ此中、如何ナル場合ニハ如何ナル理由ニ依ツテ、收益ノ遞増又ハ遞減、換言スレバ、引續キ生産費増加ノ比例以上ナル收益ノ増加又ハ其レ以下ナル收益ノ増加ヲ生ズルニ至ル可キヤヲ明瞭ニスルデ有ラウ。

三、收益遞減ノ法則

一、收益ノ遞増減ガ規則正ク起ル第一ノ場合ハ、一定ノ技術ノ下ニ於テ一定ノ企業ニ使用セラルル所ノ凡テノ生産要素ヲ一定ノ割合ニ從ツテ同時ニ増加スルコ

ト無ク、即チ生産費ノ中一種又ハ數種ノ費目ハ之ヲ元ノママニ存シ置キテ毫モ増減スルコト無ク、而シテ其他ノ費目ハ凡テ之ヲ同ジ割合ニテ増加スル場合デアアル。收益又ハ産額増加ノ目的ヲ以テ行ハルル總生産費ノ増加ニ就テハ、余ハ前節ニ於テ種々ノ標準ニ依リ各々之ヲ數個ノ場合ニ分ツタ。今茲ニ述ベントスル場合ヲ這個ノ標準ニ照シテ分析センカ、先ヅ生産費ノ増加ニ伴フ各種費目ノ割合ノ變化如何ヲ標準トセル分類ニ依レバ、既ニ述ベシ第二ノ場合ニ屬シ、更ニ生産費ノ増加ガ技術ノ變化ヲ伴フヤ否ヤヲ標準トセル分類ニ依レバ、既ニ述ベシ第一ノ場合ニ屬シ、最後ニ謂フ所ノ收益ノ増加ガ特定ノ一企業ニ拘ル事ナルカ又ハ社會全體ヨリ見テノ事ナルカヲ標準トセル分類ニ依レバ、茲ニ述ベントスル場合ハ正ニ前者ニ屬スル。

二、扱テ此場合ニ於ケル收益ノ遞増減ハ、明カニ之ヲ一ノ法則ニ攝シ得ル。其法則トハ即チ所謂收益遞減ノ法則ニシテ、此法則ニ從ヘバ、生産費ヲ増加スルニ從ヒ或程度マデハ引續キ收益ノ遞増ヲ生ズレドモ、或程度ヲ超ユル時ハ次第ニ收益ノ遞減ヲ見ルニ至ルモノトス。而シテ斯カル法則ノ行ハルルニ至ル所以ハ、余ノ嘗テ論ジタルガ如ク（一）、一定ノ技術ノ下ニ於テハ、組合ハサルベキ各種生産要素ノ割合

ニ一定ノ理想的標準ガアル爲メデアル。サレバ一定ノ生産要素ニ組合ハサルベキ他ノ生産要素ノ分量ニシテ、若シ此標準ニ照シ未ダ過小ナル場合ニハ、之ガ分量ヲ増加スルニ從フテ、各生産要素ノ割合ハ次第ニ理想的標準ニ近ヅクコトト爲ルガ爲メ、其收益ハ實ニ絶對的ニ増加スルノミナラズ、相對的ニモ増加スルニ至ルベキ筈デアツテ、即チ所謂收益ノ遞増ナル現象ガ起ル。然ルニ若シ之ト異リ、一定ノ生産要素ニ組合ハサルベキ他ノ生産要素ノ分量ガ、彼ノ理想的標準ニ照シテ既ニ過大ナル場合ニハ、之ガ分量ヲ増スニ從フテ各生産要素ノ割合ハ次第ニ理想的標準ヲ遠ザカルコトト爲ルガ故ニ、其收益ハ縱ヒ絶對的ニハ増加スルモ、相對的ニハ減少スベキ筈デアツテ、即チ所謂收益ノ遞減ナル現象ガ起ルノデアル。從來收益遞減ノ法則ト稱セララルモノハ、其適用ノ或ハ農業ニ限ラレ、或ハ土地ノ利用ニ限ラル等、狭キニ失スルノ嫌ハアリタレドモ、其本質ハ如上ノ原因ニ本ク收益ノ遞減ヲ指スニ外ナラザルコトハ、余ノ既ニ論述シタ所デアル。

四、企業組成ノ法則

一、收益ノ遞増減ガ規則正ク起ル第二ノ場合ハ、一定ノ技術ノ下ニ於テ、一定ノ企

業ニ使用セラルル所ノ各生産要素ヲバ、凡テ同ジ割合ニ依ツテ同時ニ増加スル場合デアアル。言ヒ換フレバ、單ニ或費目ノミヲ増加スルコト無ク、各費目ノ比例ハ之ヲ元ノママニ維持シナガラ、凡テノ費目ヲ通ジ同ジ割合ニテ之ヲ増加スル場合デアアル。之ヲ前節ニ於テ述べタル場合ト比較セバ、生産費ノ増加ガ一定ノ技術ノ下ニ於テ行ハルルモノタルニ於テ同一デアリ、ソガ特定ノ一企業ニ拘ルモノタルニ於テ亦同一デアツテ、只其ノ相違スル所ハ、前ノ場合ニ於テハ總生産費ノ増加ニ伴ヒ各費目ノ比例ハ次第二變化セシニ反シ、後ノ場合ニ於テハ縱ヒ生産費ヲ増加スルモ各費目ノ比例ヲ變更セザル點ニ在ル。今了解ニ便ナル爲メ、之ヲ一定ノ方式ニ表ハサンカ、是等二個ノ場合ハ不完全ガノ之ヲ左ノ方式ニ收ムルコトヲ得。

| 或生産要素 | | 其他ノ生産要素 | | 收 益 | |
|-------|------|---------|------|------------------|-----|
| 前節ノ場合 | | | | | |
| X | Y | X | Y | R | |
| aX | bY | aX | bY | $R' > aR$ (收益増増) | チ生ズ |
| aX | bY | aX | bY | $R' < aR$ (收益減減) | チ生ズ |
| 本節ノ場合 | | | | | |
| X | Y | X | Y | R | |
| aX | bY | aX | bY | $R' > aR$ (收益増増) | チ生ズ |
| aX | bY | aX | bY | $R' < aR$ (收益減減) | チ生ズ |

二、扱テ此場合ニ於ケル收益ノ遞増減モ亦明カニ之ヲ一ノ法則ニ攝スルコトヲ得。カーバーハ之ヲ名ケテ the law of increasing or decreasing economy of large-scale production^①ト謂ヒ、ばろつくハ又之ヲ名ケテ the law of economy in organization^②ト謂ヘドモ、何レモ未ダ學界ニ通用スルニ至ラズ。余ハ便宜ノ爲メ、本論ニ於テハ假ニ之ヲ名ケテ企業組成ノ法則ト謂フ。

思フニ此場合ニ於テハ、技術ニ何等ノ變化ナク、各生産要素ノ割合ニモ亦何等ノ變化ナキ故、全體ノ生産費ヲ増加スルコトニ依リテ生ズル所ノ收益ノ増加ハ、生産費ノ増加ト比例スベキ筈デアル。然ルニ實際ニ於テハ、此場合ニモ、一定ノ點ニ達スル迄ハ收益ノ遞増ヲ生ジ、其點ヲ超ユル時ハ收益ノ遞減ヲ生ズルニ至ルコト、恰モ收益遞減ノ法則ノ場合ト同ジコトデアル。之ハ何故デアルカト云ヘバ、一定ノ生産要素ヲ結合シテ其生産上ノ機能ヲ完カラシムルハ企業者ハ働キデアルガ、其企業者ノ企業能力ナルモノガ一定シテ居テ、之ニ組合ハサルベキ生産要素ノ分量ニ自ラ一定ノ理想的標準ガ在ル爲メデアル。即チ此企業組成ノ法則ノ行ハルル所以ハ、恰モ各生産要素ノ組合セニ一定ノ理想的標準ガ在ル爲メ、彼ノ收益遞減ノ法則ナル

1. Carver, The Distribution of Wealth, 1904 p. 91.

2. Bullock, The Variation of Productive Forces.

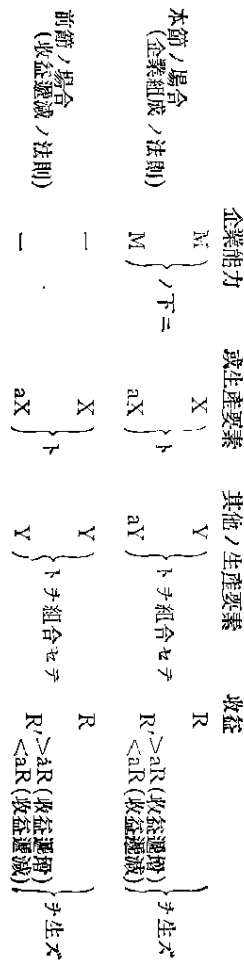
(Quaterly Journal of Economics, vol. XVII, p. 487.)

モノガ行ハルルニ至ルト全ク同ジ事デアル。

然ラバ如何ナル場合ニ收益ノ遞増アリ、又如何ナル場合ニ收益ノ遞減アリヤト云フニ、第一、一定ノ企業能力ニ組合ハサルル所ノ生産要素ノ總量ニシテ未ダ過小ナル場合、換言スレバ、其企業者ニトリテ企業未ダ小規模ニ過ギ、從テ其企業能力ハ未ダ充分ニ全力ヲ發揮スルニ至ラズ、餘力ノ利用サレズシテ徒ニ剩レルモノ猶ホ多キ場合ニ於テハ、之ニ組合ハスベキ各生産要素ノ分量ヲ増加スルニ從ヒ、換言スレバ、其企業ノ規模ヲ擴張スルニ從ツテ、是ガ爲メニ生ズル收益ノ増加ハ、生産費ヲ増加セシ比例以上ニ上ルコトト爲リ、第二ニ、若シ其一定ノ企業能力ニ組合ハサルル所ノ生産要素ノ總量ニシテ既ニ過大ナル場合、換言スレバ、其企業者ニトリテ企業既ニ大規模ニ失スル場合ニ於テハ、之ニ組合ハスベキ各生産要素ノ分量ヲ増加スルニ從ヒ、換言スレバ、其企業ノ規模ヲ擴張スルニ從フテ、是ガ爲メニ生ズル收益ノ増加ハ、益々生産費増加ノ比例ニ及ブ能ハザルコトト爲ルノデアル。

此ノ如ク企業組成ノ法則ノ行ハル、所以ハ、前節ニ述ベシ收益遞減ノ法則ノ行ハルル所以ト同ジデアツテ、即チ此法則モ亦、物ノ組合セニハ一定ノ理想的比例アル

モノナリテフ彼ノ所謂比例ノ法則ノ一適用ニ過ギヌモノデアル。故ニ此場合ノ事情ヲバ、前節ニ述ベシ場合ノ事情ト比較シテ之ヲ一定ノ方式ニ表ハセバ、前ニ掲ゲシ所ヲ改メテ、實ハ左ノ如クスベキモノデアル。



五、技術ノ變化ニ本ク収益ノ變化

(附、大企業及小企業ノ利害比較)

一、以上述べタル二個ノ法則、即チ収益遞減ノ法則及企業組成ノ法則ハ、共ニ技術ノ一定不變ナルコトヲ條件トスルモノデアル。サレバ生産費増加前ト後トニ於テ技術上ノ差異ヲ存スル場合ニハ、是等二個ノ法則ハ共ニ其適用ヲ失フモノナルコトヲ忘レテハナラヌ。蓋シ技術ニシテ一定センカ、既ニ述ベシ如ク、組合ハサルベキ

生産要素ノ理想的ノ割合モ亦一定シテ動かザルガ故ニ、第一ニハ、單ニ或生産要素ノミヲ増加シ其他ノ生産要素ハ之ヲ一定ノ分量ニ確定シ置ク場合ニ、若シ是ガ爲メ各生産要素ノ割合ガ次第ニ件ノ理想的標準ニ近ヅクナラバ、其時ハ收益ノ遞増ヲ見、之ト異リ、若シ是ガ爲メ各生産要素ノ割合ガ次第ニ件ノ理想的標準ヲ遠ザカルナラバ、其時ハ則チ收益ノ遞減ヲ見、此ノ如クニシテ所謂收益遞減ノ法則ヲ成立セシムルニ至ルコトナリ、第二ニハ、各生産要素ノ比例ヲ變ズルコトナク、之ヲ一様ニ増加センカ、其點ノミヨリ云ヘバ、是ガ爲メニ生ズル收益ノ増加ハ正ニ生産費ノ増加ニ比例スベキ筈ナレドモ、只是等ノ生産要素ヲ結合シテ其生産上ノ機能ヲ完カシムベキ企業者ノ能力一定セルガ故ニ、之ニ組合ハサルベキ生産要素ノ分量ニモ自ラ一定ノ理想的標準アリテ、是ガ爲メ其標準ヲ中心トシテ、或ハ收益ノ遞増ヲ見、或ハ其遞減ヲ見、此ノ如クニシテ所謂企業組成ノ法則ヲ成立セシムルニ至ルノデアアル。此ノ如ク、是等法則ノ成立ハ、一ニ技術ノ一定不變ヲ以テ條件トスル。サレバ若シ生産費増加前ト後トニ於テ技術上ノ差異ヲ存センカ、其場合ニ果シテ收益ノ減少ヲ見ルベキカ將タ其増加ヲ見ルベキカハ、之ヲ個々ノ場合ニ就テ決定スル

ノ外ナク、到底之ヲ一個ノ法則ニ攝シ得ベカラズ。蓋シ技術ニシテ變化センカ、組合ハサルベキ生産要素ノ理想的ノ割合モ亦之ニ伴フテ變化スルガ故ニ、縱ヒ以前ノ技術ノ下ニ於テナラバ既ニ收益ノ減少ヲ見ルニ至ルベキ場合ト雖、新タナル技術ノ下ニ於テハ、或ハ引續キ收益ノ増加ヲ見ルニ至ルベキカ、或ハヨリ甚キ收益ノ減少ヲ見ルニ至ルベキカ、到底之ヲ法則的ニ測知スル方法ナキガ爲メデアル。

尤モ技術ノ進歩ナルモノガ、使用セラルル各生産要素ノ比例ノ變動ト一定ノ聯絡ヲ保ツモノナルニ於テハ、縱ヒ技術ノ變化アル場合ニ於テモ、收益ノ遞増減ハ之ヲ一定ノ法則ニ攝シ得ベキ筈ナレドモ、事實ニ於テ技術ノ進歩ト使用セラルル生産要素ノ比例トノ間ニハ、何等一定ノ聯絡ナキモノデアル。普通ニハ、農業上ニ技術ノ改良ガアルト、一定ノ土地ニヨリ、多クノ資本又ハ勞働ガ加ヘラルルコトニ爲リ、又工業上ニ技術ノ改良ガアルト、資本殊ニ機械ガ勞働ヲ排除スルコトニ爲ルト云フヤウニ考ヘラレテ居ルガ、事實ハ必シモ左様デハ無イ。

余ハ先キニ近時我國ニ於ケル稻ノ苗床ノ改良ハ、從來一坪ニ殆ド一升ノ種子ヲ蒔キシモノヲ、減ジテ二三合ト爲セシコトニ存スル旨ヲ語ツタ。是レ些事ナレドモ、以テ農業ノ技術的改良ガ必シモ土地ノ集約的利用ヲ伴ハサルノ一例ト爲スニ足ルデ有ラウ。此點ニ就テハ近頃きやなんモ之ヲ明瞭ニ指摘シテ居ル。曰ク(一)

It is sometimes assumed that all additions to knowledge are like this invention (the invention of steam locomotion on iron rails), and thus all tend to raise the rate of interest. But this is a complete mistake. While some inventions increase the comparative advantage of working with stores and expensive instruments, other inventions diminish it. We are apt to think that invention in practice always takes the form of the discovery of means which require more elaborate machinery. This is, however, only because the inventions of which we are reminded are those which are called to mind by the presence of the elaborate machinery required to utilize them: the others, which have simplified processes and led to the disappearance of elaborate — or, as we ungratefully say, clumsy — machinery leave no visible trace and are soon forgotten. Yet they are obviously of great importance — for all we know of even greater importance than the other kind of invention.

二 扱テ收益遞減ノ法則及企業組成ノ法則ニシテ技術ノ一定不變ヲ條件トスルコト上述ノ如シトセバ、彼ノ大企業及小企業ノ利害ノ比較ハ、到底是等ノ法則ノ適用ニ依ツテノミ決定シ得ベカラザルコト、明白デアアル。抑々大企業及小企業ノ利害比較論ハ、嘗テみるガ其著經濟原論(1)ニ於テ Of production on a large, and production on a small scale ト題スル一章ヲ設ケテヨリ、今ニ至ルモ猶ホ多クノ學者ガ其原論ニ於テ特ニ一章ヲ割ク所ノ一題目デアツテ(2)且學者ニ依ツテハ之ヲ以テ余ガ先キニ述ベタル企業組成ノ法則ト同一視スル者モアルガ(3)實際ニ於テハ此問題ハ甚ダ複雑ニシテ、到底之ヲ一個ノ法則ニ攝スルヲ得ザルモノデアアル。

1. J. S. Mill, Principles, Book I. chap. IX.

2. 例ヘバ Marshall, Economics, Book I. chap. XI.; Nicholson, Political Economy, Book I. chaps. VIII and IX.; Taussig, Principles, Book I. chap. IV.

3. Carver, The Distribution of Wealth, 1904, p.90 et seq.

先ヅ之ヲ收益遞減ノ法則トノ關係ニ就テ考フルニ、一定ノ技術ノ下ニ於テ、或種ノ生産要素ヲバ現狀ノママニ維持シ、其他ノ生産要素ヲバ同ジ割合ニテ増加スルコトニ依リ、企業ノ規模ヲ擴張スル限リニ於テハ、其企業ノ規模ノ大小ニ關スル利害ノ論ハ、一ニ收益遞減ノ法則ノ適用ニ依ツテ定マル。又之ヲ企業組成ノ法則ニ就テ考フルニ、一定ノ技術ノ下ニ於テ、各生産要素ヲ一樣ノ割合ヲ以テ増加シ、カクテ其間ノ比例ヲ變化スルコトナクシテ、企業ノ規模ヲ擴張スル限リニ於テハ、其企業ノ規模ノ大小ニ關スル利害ノ論ハ、一ニ企業組成ノ法則ノ適用ニ依ツテ定マル。乍併企業ノ規模ノ擴張ハ、必シモ此ノ如キ方法ヲ以テノミ行ハルルモノニ非ズ。即チ大企業ト小企業トニテハ、各生産要素ノ割合ノ差異ガ、必シモ上ニ述べタルガ如キ二種ノ何レカ一ニ限ラザルノミナラズ、此點ニ就テハ本論第二節ノ一二之ヲ述ブ、其技術モ亦之ヲ異ニスル點多キヲ常トスルモノデアル、(此點モ亦本論第二節ノ一二ニ之ヲ述ブ)。故ニ企業ノ規模ノ大小ニ關スル利害ノ問題ハ、或部分ハ收益遞減ノ法則ニ依ツテ支配サレ、或部分ハ企業組成ノ法則ニ依ツテ支配サレ、或部分ハ企業ノ大小ニ伴フ技術ノ差異ニ依ツテ支配サレルノデ、要スルニ之ニ關スル一般的法則ヲ

立ツルコトハ不可能デアル。

六、社會全體ヨリ見たル産額ノ増減ト

生産費ノ増減トノ關係

一、扱テ以上述べタル所ハ、凡テ一企業ニ關スル産額増加ノ問題デアツタガ、既ニ本論ノ首メニ述べタ如ク、收益又ハ産額増加ノ目的ヲ以テ行ハルル總生産費ノ増加ハ、ソガ特定ノ一企業ニ拘ル事ナルカ、又ハ社會全體ヨリ見たノ事ナルカニ依ツテ、實ハ大ニ其趣ヲ異ニシテ來ルノデアアル。何故ト云フニ、社會全體ノ供給ヲ増加セシムル爲メニハ、必シモ既存企業ノ産額ヲ増加スルノ必要ナク、新タニ企業ヲ新設スルコトニ依リ、換言スレバ、各企業單位ノ産額ヲ増加セズトモ、企業單位ソノモノヲ増加スルコトニ依リテ、其目的ヲ達シ得ラルルカラデアアル。サレバ此場合ニ於ケル收益ノ遞増又ハ遞減ヲ決定スル條件ハ、前節ニ於テ述べタル諸條件ニ加フルニ、更ニ企業數ノ増加ニ依ツテ生ズル影響ヲ以テシナケレバ爲ラヌノデ、之ヲ一定ノ法則ニ攝スルコトハ固ヨリ不可能デアル。

二、嘗テみるハ其著經濟原論(I)ニ於テ貨物ノ價格ヲ論ズルニ當リ、貨物ノ種類ヲ

分ツテ、第一、或狹キ限度以上ニハ其分量ヲ増加スルコトノ物理的ニ不能ナルモノ、第二、一定ノ生産費サヘ投ズルナラバ無限ニ之ガ供給ヲ増加シ得ラルルモノ、第三、之ガ供給増加ノ爲メニハ次第二比較的多クノ生産費ヲ必要トスルモノノ三ツト爲シタ、而シテ此區別ハ、今ニ至ルモ猶ホ多クノ學者ノ採用スル所ニシテ、只之ニ加フルニ更ニ第四ノ種類トシテ、之ガ供給ヲ増加スルニ從ヒ生産費ヲ要スルコト次第二少キモノヲ以テスルノ差アルノミデアル。

右ノ中第三ノ生産費遞増ノ場合ハ即チ收益ノ遞減ヲ見ル譯デアリ、第四ノ生産費遞減ノ場合ハ即チ收益ノ遞増ヲ見ル譯デアルガ、是等ノ場合ニ於ケル收益ノ遞増減ヲ以テ收益遞減ノ法則ノ作用ニ本クモノト爲スハ、大ナル誤解デアル(註)。蓋シ既ニ述ベシ如ク、收益遞減ノ法則ナルモノハ特定ノ一企業ニ就テ產額ヲ増加スル場合ニ其適用ヲ見ルニ止ルニ反シ、社會全體ノ產額ヲ増加スル場合ニ起ル收益ノ増減ハ、審ニ此收益遞減ノ法則ニ依リテ支配サルルノミナラズ、其他種々ノ條件ニ依リテ左右セラルルモノナルガ爲デアル。

(註) 余ハ拙著「經濟原論」ニ於テ全然此誤謬ニ陷ツテ居ル。併シ此ノ如キ誤謬ハ決シテ余一人ノミニ限ルノデハ無イ。

特定ノ一企業ニ關スル收益ノ遞増減ト、社會全體ヨリ見たル收益ノ遞増減トヲ區別スルコトハ、先キニ述ベシ第四種ノ貨物、即チ社會全體ノ供給ヲ増加セントスル場合ニ生産費ノ遞減(換言スレバ收益ノ遞増)ヲ生ズル貨物ニ就キ、之ガ供給ヲ減少スルナラバ其生産費ハ如何ナル變化ヲ起スヤヲ研究スルニ際シテ、特ニ必要デアル。尤モ此ノ如キ種類ノ貨物ノ生産者ヲ以テ、凡テ同一ノ條件ヲ具フルモノトスルナラバ、換言スレバ、生産者中有利ノ條件ヲ具フル者ト然ラザル者トノ差別ナク、從テ市場ニ提供セラルル貨物ノ生産費ハ凡テ一樣ナリトスルナラバ、(註)全供給が一獨占者ニ依ツテ供給サレツツアル場合ト同ジコトデアルカラ、別ニ此區別ヲスル必要ハナク、只從來ノ説明デ差支ハ無イ。即チ其供給ヲ減少スル時ハ、其増加ノ場合ト正ニ相反シ、各單位ノ生産費ハ供給ノ減少ニ伴フテ次第ニ増加スルノデアアル。乍併、若シ生産者中有利ノ條件ヲ具フル者ト然ラザル者トノ差別アリ、換言スレバ市場ニ提供セラルル貨物ノ生産費ニ大小ノ差別アリ、從テ其貨物ノ價格ハ常ニ限界生産費ニ相當スル額ニ決定セラレツツアリトセンカ、此場合ニ於テハ、其供給ヲ減少スルモ、各單位ノ生産費ハ増加スルコト無クシテ、却テ之ヲ減少スルコト、恰モ第三

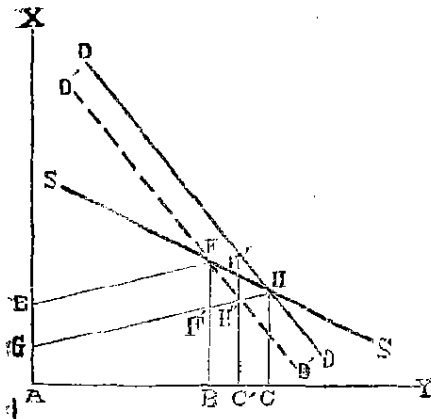
種ノ貨物(即チ產額ノ增加ニ伴ヒ其生産費ヲ遞増スルモノ)ノ場合ト全ク同一デアアル。
(註) 拙著「經濟原論」ニ於テハ、此假定ヲ採リシガ故ニ、——斯カル假定ヲ設クルコトノ是非ハ姑ク舍キ——茲ニ述ベントスル
非難ハ免カル。

ソハ何故ゾト云フニ、嘗テばろつくノ最モ明白ニ指摘セシ如ク、(I) 其供給ノ減少ハ主トシテ限界生産者ノ廢業ニ依ツテ生ズルカラデアアル。余ハ先キニ、社會ニ於ケル或種ノ貨物ノ供給増加ハ、新タナル企業者ノ増加、換言スレバ企業數ノ増加一ヨリテモ生ジ得ルモノナル事ヲ述ベタ。其ト同ジ理由ニ依ツテ、產額ノ減少ハ、或企業者ノ廢業、換言スレバ企業數ノ減少ニヨリテモ生ズベキ筈デアアル。否ナ需要ノ減少、價格ノ下落、從テ供給減少ノ必要ガ若シ一時的ノ現象デアラナラバ、產額ノ減少ハ凡テノ企業ヲ通ジ同ジ割合ヲ以テ行ハルルコトガ有ルトシテモ、若シ其ガ永續的ノ現象デアル場合ニハ、限界生産者ハ晩カレ早カレ遂ニハ排斥サレテ仕舞ツテ、有利ナ條件ヲ具ヘテ居ル生産者ガ以前ト同ジ產額ヲ生産スルニ至ル筈デアラカラ、(註) 此ノ如キ場合ニハ社會全體ヨリ見テコソ供給ノ減少トナレ、有利ノ條件ヲ具フル企業ニ就テ云ヘバ、其產額ハ以前ト少シモ違ハヌコトニ爲ルノデアアル。サレバ供給減少前ト後トヲ比較センカ、前ノ場合ニハ限界生産者ノ產物ガ供給ノ一部ヲ

構成シテ居タノガ、後ノ場合ニハ其ガ無クナツテ、有利ノ條件ヲ具フル生産者ノ產物ガ供給ノ全部ヲ占メ、從テ之ヲ社會全體ヨリ云ヘバ、貨物ノ限界生産費ハ、貨物ノ供給減少ノ爲メ、密ニ之ヲ増加セザルノミナラズ、却テ以前ヨリモ減少スルコトト爲ルノデアル。(註二)

(註一) ばろックノ言フ所ニ據レバ、始メテ此點ヲ注意セシ學者ハしづくニシテ、其文ハ左ノ如シ。

It does not follow from this that a fall in demand will have a similar tendency to increase the cost of production; in most cases the effect of such a fall would, I conceive, rather be to diminish the number of separate establishments in which the branch of production in question was carried on. (1)



茲ニ rather ト云ハルハ、一般的ノ立言トシテハ適當デアル。併シ一時的ノ現象

トシテテ無ク、之ヲ永續的ノ現象トシテ考フル時ハ、限界生産者ハ價格ノ下落ノ爲メ其生産費ヲ價フコト能ハザルガ故ニ、遂ニハ廢業ノ已ニナキニ至ル筈デアル。

(註二) 本文ニ述ベシ所ヲ普通ニ用非ララル圖式ニ依リテ説明センニ、上圖中 S S 線ヲ以テ供給ヲ表ハシ、D D 線又ハ D' D' 線ヲ以テ需要ヲ表ハスモノトセバ、需要ノ狀態D D 線ニ相當スル場合ハ、價格ハ H C ニシテ、供給ノ分量ハ A C デアル。然ルニ需要減退シテ D' D' 線ニ相當スルニ至レル場合ニハ、普通ノ説明ニ從ハバ、供給ハ減少シテ A B トナリ、價格ハ騰貴シテ F B トナルト云フノデアル。乍併、余ノ説明セシ所ニ從ハバ、縱ヒ供給ハ減少シテ A B トナルモ、其場合ノ限界生産費ハ T B ニアラズシテ F B デアル。——蓋シ本圖ニ於テ G H 線ハ、市場ニ供給セラルル貨物ノ各單位ノ生産費ノ相違ヲ示ス。即チ供給 A C ノ場合ニハ、限界生産者ハ其貨物一單位ニ就キ H C ノ生産費ヲ費セドモ、最も有利ノ條件ヲ具フル生産

者ハG Aタケノ生産費ナ費スニ過ギザルユト等ヲ示ス。――サレバ需要減退シテD₁ D₂線ニ相當スルニ至レル場合ニハ、供給ハ減少シテA₁トナルニ非ズシテ、A₂トナルニ止ル、而シテ限界生産費ハ元トH Cナリシモノガ、増加シテF B又ハH' Cトナルニ非ズシテ、却テ減少シテH' Cトナルト云フノデアル。